OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	言語文化学 Vol.16　編集後記
Author(s)	森, 祐司
Citation	大阪大学言語文化学. 2007, 16, p. 206-206
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77881
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

編集後記

『言語文化学』の第16号をお届けします。事前の調査では論文31編、研究ノート1編、書評1編、図書紹介2編の投稿希望があり、実際に投稿があったのが論文20編、研究ノート1編、図書紹介2編でした。厳正な査読と審査を経て、本号では、13編の論文と2編の図書紹介が採用されました。論文の採択率は65％ほどということになります。編集に際しては、昨年度の委員会の方針を引き継ぎ、掲載論文等の採択に関しては編集小委員会を中心として査読者の決定から査読作業、採択論文の決定までを厳正に行ないました。本年度は、それ以降の雑誌の編集・校正作業については別の責任者を設け作業の分担を図りました。

あらためて言うまでもありませんが、『言語文化学』という雑誌の特徴は、研究対象やアプローチの方法等の多様さにあります。地域、時代、言語、文化の広がりは、大阪大学言語文化学会会員の学問性に内在する潜在的可能性を示すものだと自負します。しかし、同時に、既成の学問領域の枠にはまらない広がりや枠を超えた領域への挑戦には、つねに、学問的消化不良に陥る危険性が孕んでいます。言語文化学会の会員には、隣接する既成の学会への強い意識や目配りが必要であるように感じています。そのためには、各自の研究領域に関わる他の学会への参加や挑戦が不可欠だと思います。「他流試合」を重ねていくことで、「言語文化学」という学問領域を磨き上げていくことに努めていきたいものだと考えます。

本誌の刊行に際しても、査読者の皆様の熱心な査読、コメントをいただきました。この場をかりて、お礼を申し上げます。本年度は、編集作業の真っ只中の10月に、事務局の要である助手の交代という「事件」がありました。中道先生には結局最後までご尽力をいただきました。また、円滑な引継ぎもさることながら、新助手の三宅先生の有能振りには目を見張るものがありました。お二人に感謝。

最後になりますが、初めての編集作業で戸惑う中、投稿していただいたすべての執筆者の論文にこめられた熱意に大いに励まされました。残念ながら今回掲載されなかった論文も含めすべての執筆者の方々に感謝いたします。ありがとうございました。

2007年3月

大阪大学言語文化学会委員会（森　祐司）